



Case

# 1

## 「自分にとっての働く」を考える高校事例

社会の変化に振り回されることなく、一人ひとりが自分の良さを生かして働いていくために、高校は何ができるのでしょうか。3校の事例から探ります。

### スクールスローガン「HAPPY」をカリキュラムに落とし込み 自分らしさを活かした人生をめざす

「幸せ」と「自分らしさ」を  
スクールスローガンに

「HAPPY」というスクールスローガンを掲げている白根高校。「幸せ」という意味と同時に、図1のように「Healthy」「Active」「Positive」「Powerful」「Yourself」の頭文字をひなげた「HAPPY」でもある。特に「(Be) Yourself」が表す「自分らしさを活かした人生を送ること」を願ったスローガンだ。「自分らしさ」とは、人が自分の役割を果たして活動し社会に貢献すること、つまり「働くこと」を通して表現できるものと考えている。

2020・2021年度には山梨県の「キャリア教育推進実践研究校」の指定を受け、「HAPPY、自分らしさを活かした人生をめざして」という主題で研究を実践。この取組は文部科学省の

「第14回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」の表彰校に選出されている。

幸せ因子を言語化して  
生徒の目標を可視化する

取組の背景には、同校の生徒が大人しくて真面目な一方で、高校入学までにリーダー経験などが少なく、自己肯定感が低いという課題があった。

「高校で自分の殻を破りたいと考えている生徒が多いと感じています。例えば、女子生徒がやりたい活動の人気ナンバー1が生徒会活動です。自信をもって人前に立てる力をつけたいという意欲の表れだと思えます」(中村千尋校長)

「こうした生徒たちにそれぞれの幸せについて意識させること、生徒自身が自分のキャリアを考えるうえで、学校でのさまざまな取組がつながりのある

図1 白根高校のキャリア教育の概要



ものごととらえられることを念頭におきました(進路指導研究係主事の秋山香江先生)

自分の殻を破り、「幸せ」という極め

て個人的で抽象的な目標に向かって、生徒たちが何をどう目指せばよいか。悩んだ秋山先生は、慶應義塾大学の前野隆司教授の幸福に関する研究と

白根高校(山梨県立)





校長 中村千尋 先生(左)、  
進路指導研究係主事(取材時) 秋山香江 先生(右)

【インターンシップの流れ】

事前学習



10企業のブースから生徒が3企業を選んで話を聞く「地元の企業を知る」(上)。「分野別職業人講話」(下)は座談会方式で進められた。

インターンシップ実施



2年生の全生徒が44企業で実施。一人で行く生徒もいたが、緊張しながらも自分に課せられたことをやり遂げ、企業から良い評価を得たことが自信につながっていた。

報告会



全員がポスターで自分の体験をまとめ、各クラスの代表が1年生に向けて「インターンシップ説明会」という形式で報告を行った。

出合う。前野教授の提唱する、幸せの4つの因子を生徒アンケートに取り入れ、その質問の提示自体で生徒に「幸せとは」を考えさせ、かつ振り返りで自分の成長を測れるようにした。  
 幸せの4つの因子とは、つながりと感謝を示す「ありがとう!」因子、前向きと楽観を示す「なんとかなる!」因子、独立とマイペースを示す「あなたらしく!」因子、自己実現と成長を示す「やってみよう!」因子だ。  
 アンケートでは、キャリア教育で育成すべきとされている基礎的汎用的能力に関する項目と、幸せの4因子に関する項目について、合計22問の設問に対して自分の状況を「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」まで5段階で回答する形式になっている(30ページの図2)。高校入学時の1年生の6月、1年生終了時の3月、2年生でインターンシップを経験した後の9月の、計3回で生徒の変化を測っている。

「HAPPY」自分らしさを活かした人生をめざして」を主題に掲げたキャリア教育は、クロスカリキュラムとインターンシップの二本柱で進められている(図1)。以下、二本柱の取組の詳細について紹介していく。  
 クロスカリキュラムは、HAPPY(幸せ)をテーマに複数の教科・科目で授業を行う。  
 例えば、家庭科では、自分の幸せに必要なものを「地位財・非地位財」(経済学者のロバート・フランクが提唱。他人との比較で満足を得るものを「地位財」、他人との相对比较とは関係なく幸せが得られるものを「非地位財」と定義)に分類する授業、国語科ではスクールスローガンからキャッチコピーを考える授業、情報科では「学校のHAPPYなところ」を見つけて話し合う授業などだ。幸せについて、複数の教

一つのテーマを複数教科の視点で多角的に学んでいく

科・科目の視点で多角的に考え、生徒たちが自分ごととして理解し、その実現のために主体的に動き始めることをねらいとしている。  
 「全教員の指導案は共有フォルダーで参照できるようにしています。家庭科の授業の内容を国語科で活用したりと、教科を越えて参考にしながら授業を設計していただきました」(秋山先生)

事前事後の学びまで丁寧に設計されたインターンシップ

インターンシップは白根高校のキャリア教育の核と位置づけられ、2年生全員が地元の事業者で職業体験をする。2004年にスタートした歴史ある取組で、コロナ禍が始まった2020年度は中止を余儀なくされたものの、2021年度は全員の受け入れ先を確保することができた。  
 インターンシップに生徒が目的意識をもって取り組み、経験を自分ごと化するために、事前学習から事後の報告

会まで丁寧にプログラムを設計している(左の写真)。  
 事前学習では、1年時に「地元の企業を知る」ワークを実施。来校した10企業から各生徒が3企業を選んで話を聞き、自分がどんな企業に興味をもてるかを考える。「分野別職業人講話」では17分野から2分野の話を聞く。少人数制の座談会方式で、生徒たちが

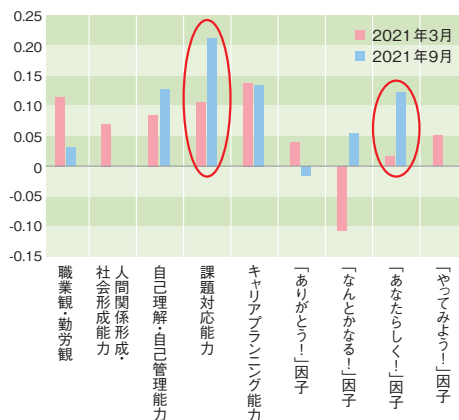
知りたいことを質問しやすい形式になっている。2年生になってからは、ビジネスナー講座を実施。昨年度は東京のビジネスナーの講師からオンライン形式で講習を受けた。  
 インターンシップは7月下旬の3日間行われ、2021年度は44企業で127名の生徒を受け入れてもらった。コロナ禍により直前で受け入れ中止の申し入れがあるなど、必ずしも全生徒が希望通りの業種・職種では体験できなかったが、それでも多くの学びがあった。  
 「働く」とは具体的にどういうことなのかを自分の目で見てくることが重

図2 アンケートデータから見える生徒の変化

「キャリア・幸せ因子」に関するアンケート [ダウンロード可](#)

<p><b>職業観・勤労観</b></p> <p>1)働くことに対して不安や緊張感はなく、社会に出ることを楽しみにしている</p>
<p><b>人間関係形成・社会形成能力</b></p> <p>2)相手の考えや意見を聞き、理解しようとしている 3)自分の考えや気持ちを整理して伝えようとしている 4)周囲の人と力を合わせて行動しようとしている</p>
<p><b>自己理解・自己管理能力</b></p> <p>5)指示されたことだけでなく、自分で考えて行動できる 6)自分の興味や関心、長所や短所などについて自分で分かっている 7)自分の感情に流されずに、規則を守り、何事も取り組むようにしている</p>
<p><b>課題対応能力</b></p> <p>8)苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組むようにしている 9)調べたいことがある時、自ら進んで資料や情報を集めるようにしている 10)解決する問題や課題があった時、原因を考え、解決方法を工夫している 11)計画的に物事を進めたり、改善を加えて実行した/している</p>
<p><b>キャリアプランニング能力</b></p> <p>12)学ぶことと働くことの意味について理解するようにしている 13)学校での勉強と自分の将来をつなげて考えるようにしている 14)自分の将来について目標を立て、その実現のための方法を考えている</p>
<p><b>「ありがとう!」因子</b></p> <p>15)人の喜ぶ顔を見るのが好きだ 16)いろいろなことに感謝するほうだ</p>
<p><b>「なんとかなる!」因子</b></p> <p>17)いま抱えている問題はだいたい何とかなると思う 18)失敗や嫌なことに対し、あまりくよくよしない</p>
<p><b>「あなたらしく!」因子</b></p> <p>19)自分と他人をあまり比べないほうだ 20)他人に何と思われようとも、やるべきだと思うことはやるべきだ</p>
<p><b>「やってみよう!」因子</b></p> <p>21)得意としていることがある 22)何か、目的・目標を持ってやっていることがある</p>

●「キャリア・幸せ因子」に関するアンケート



1年生の6月を基準(0)とし、2回目、3回目の変化を表したものの、「課題対応能力」と「あなたらしく!」因子が顕著に伸びている。

要です。希望の職種とは違っていても、さまざまな職種の大人たちがそれぞれの思いをもって働いている姿を目の当たりにし、共に働いてみることで、自分が将来働くとしたらどのような感じになるかを想像するきっかけとなるからです。インターシッピングは『働く』を自分ごとにするうえで非常に役立つと考えています(秋山先生)

インターシッピング後は毎年報告会で振り返りをするが、昨年度は単なる報告ではなく、「1年生のためのインターシッピング説明会」とした。

「発表会のポスター作成段階で、自らの体験を周りに伝えようと客観視できず。また、それを他者の役に立てるという意味付けをしました(中村校長)

自分の体験が1年生の役に立ち貢

献できることで、自己肯定感の醸成にもつながったという。

「あなたらしく!」因子が飛躍的に伸びた生徒たち

一連の取組を経た生徒たちの変化は、図2のアンケート結果の変遷から見てとれる。また、アンケートの自由記述に表れた生徒たちの声からは、自分を客観視し、将来の進路を考える意欲が高まっている様子がうかがえる。

データでは「課題対応能力」と「あなたらしく!」因子が顕著に伸びている。「あなたらしく!」因子の設問は「自分と他人をあまり比べないほうだ」と「他人に何と思われようとも、やるべきだと思つことはやるべきだ」の2問。「幸

アンケートでの振り返りを通して、生徒たちが自分らしさを活かそうと一歩を踏み出し始めた証した。

「インターシッピング後に下降した項目もありました。それも社会の厳しさを知った気づきだと判断しています。そ

多角的な取組と社会での実体験により、同校の生徒たちは自分にとつての「幸せ」とは何かと向き合いながら進路選択に臨んでいるようだ。

生徒たちの声

- 1年生のときよりも進路について考えることが増えて、自分の進みたい道も少しずつ決まってきました。これからも真剣に考えてがんばっていきたいです。
- アンケートを通して今の自分を見つめなおすことができたと思う。
- 苦手なことにもチャレンジしてがんばっていきたい。
- 進路について調べるようになり、目標を立てて行動できるようになっている。
- 課題対応能力が高くて、職業観や「やってみよう!」因子が低かったので、自分からいろんなことに挑戦しようと思った。
- もっと目的をもって生活したほうが良いと感じた。
- 自分の夢や目標をもっと細かく考え、人生設計をしていきたい。
- 自分の将来に勉強がどのように役立つか見つけてみようと思った。
- 後半の設問で目標を尋ねられたことで、私は高校を卒業したら何をしようと考えるきっかけになった。